

2025年度

学校名 北九州市立八幡小学校

対象学年 第5学年

① 学習指導案


プログラム	No.1 1 「地域景観プランナーになろう」
単元名 (全15時間)	「地域の宝さがし大作戦！」 ～わが町自慢プロジェクト～
学習のねらい	地域の高齢者との交流やレモンロード事業の活動を通して、地域の現状や人々の思いに触れ、自分たちのまちのよさを再発見するとともに、地域社会の一員としてよりよいまちづくりに貢献しようとする態度を養う。
学習内容	1 課題の設定 2 地域の高齢者との交流 3 レモンロード事業について知る 4 レモンの木の観察や草取り 5 レモン川柳応募 6 レモンの木 看板づくり・移植
実施場所等	八幡大谷市民センター 枝光南市民センター

学習の流れ

時間	学習活動	教師の指導	評価
2	1. 校区をめぐり、まちの景観のよさや問題点を見つける。	・視点（自然、歴史、人々の工夫など）を明示し、タブレット等で写真に記録するよう促す。	○地域の現状を多角的に捉え、自分たちの生活との関わりを考えている。（思考・判断）
2	2. 自治会長の景観まちづくりに関する話を聞く。	・地域の願いや苦勞を意識できるよう、質問の時間を設け、メモの取り方を指導する。	○地域の方の思いに触れ、自分たちにできることを意欲的に見つけようとしている。（態度）
2	3. レモンロードの除草作業を行う。	・作業の意義（景観維持や防犯など）を確認し、安全に配慮しながら協力して取り組ませる。	○地域を美しく保つことの重要性を理解し、主体的に奉仕活動に取り組んでいる。（態度）
5	4. レモンの苗木を育てる。 ・収穫 ・レモン電池実験	・生育環境の調整や水やりの継続を促し、観察記録を通して変化に気付かせる。 ・移植の適切な時期や方法を指導	○苗木の成長を科学的に観察し、命を育てる責任感を持って活動している。（思考・判断） ○学習の成果を地域に還元し、
3	5. 育てた苗木をレモンロードに移植する。	し、地域の方と一緒に作業する楽しさを共有する。 ・これまでの活動を振り返り、地域への思いがどう変わったかを言語化させるよう導く。	自分たちの町への貢献を実感できている。（態度） ○探究のプロセスを振り返り、自分の成長や地域の魅力を分かりやすく表現している。（表現）
1	6. まとめる。		

② 事業実施報告書詳細

学校名 北九州市立八幡小学校

時間数	場所	概要	活動記録(写真)	対象者の反応
2	校区 枝光南市民センター	1. 校区をめぐり、まちの景観のよさや問題点を見つける。 2. 自治会長の景観まちづくりに関する話を聞く。	 ・真剣にメモを取る児童の姿を見て、地域の方も「自分たちの活動を語り継ぐ意欲が湧いた」と喜ばれていた。	・「普段何気なく通っている道に、こんなに工夫があったなんて」と驚きの声を上げていた。 ・自治会長さんの熱心な話を聞き、地域の歴史や景観を守る苦勞を知ることで、自分たちの町への見方が変わった様子が見られた。
2	レモンロード	3. レモンロードの除草作業を行う。 ・地域の方(10名程度)と一緒に、レモンロードの除草を行った。	 	・「地域の人と一緒にやると、一人でやるよりずっと楽しい!」と笑顔で作業に没頭していた。 ・地域の方からコツを教わったり、褒められたりすることで、自分たちの活動が役に立っている実感を強く持っていた。
5	レモンロード	4. レモンの苗木を育てる。 ・収穫	・「自分たちが植えた木が成長し、実をつける喜びを地域全体で共有できた」と手応えを感じていただけた。  ・住民から「レモンの成長が毎日の楽しみになっている」と声をかけられるなど、交流の輪が広がった。	・「早く大きくなれないかな」と毎日苗木を気にかけるなど、責任感と愛着を持って育てていた。 ・収穫の際には、「自分たちが守ってきたレモンだ!」と達成感に溢れた表情を見せ、地域の宝を自分たちの手で守った喜びを感じていた。



### ③ 実施内容について

#### (1) 実施にあたり工夫した点

- 「体験」と「理論」の融合：単なる除草や移植といった作業に留めず、理科的な「レモン電池実験」を取り入れることで、多角的に地域の特産物に興味を持てるよう工夫した。
- 地域の方との直接交流：市民センターや自治会長と連携し、児童が直接「地域の思い」を聞く場を設定した。作業を共にする中で、自然なコミュニケーションが生まれるよう配慮した。

#### (2) 実施にあたり苦労した点

- 継続的な管理の難しさ：苗木を育てる過程で、長期休暇中や天候不順時の管理をどのように継続させるか、児童の主体性を削がずにどう支援するか調整に苦労した。
- 外部団体とのスケジュール調整：地域の方々の都合と学校の授業時数を合わせる際、活動の質を落とさずに時間を確保する調整が必要だった。

#### (3) 児童の反応

- 自分たちが植えた苗木や設置した看板が、地域の景観の一部になることに大きな誇りと喜びを感じていた。
- 当初は「ただの草取り」と捉えていた作業も、地域の方から「ありがとう」「助かるよ」と声をかけられることで、自己有用感を高め、町づくりに貢献する意識へと変化していった。

#### (4) 担当教諭及び担当外教諭の変化

- 地域の方の教育力や専門的な知識に触れることで、教員自身も「地域は生きた教科書である」という認識を深め、外部連携への抵抗感が少なくなった。
- 学年外の教諭からも、児童の生き生きと活動する姿やレモン電池実験の成果が話題になり、学校全体で地域の魅力を再確認する機運が高まった。

#### (5) 今後の課題と取り組み〔児童の思考過程と指導内容との関連付けから、留意すべき事項等〕

- 「継続性」の確保：単年度の活動で終わらせず、次年度の5年生へどのようにバトンを渡すか、学びの継承が課題である。
- 探究の質の向上：現在は「体験・交流」が中心だが、今後は「地域のレモンをブランド化するには？」といった、より踏み込んだ課題解決型の学習へと発展させていきたい。